



校友会会報

第11号

2005年1月15日

編集・発行

酪農学園大学同窓会

校友会会報編集委員会

〒069-8501 江別市文京台緑町582

同窓生会館内

☎ (011) 386-1196

FAX (011) 386-5987

HP: <http://dousoukaikouyukai.>

web: infoseek.co.jp

E-mail: rg-kouyu@rakuno.ac.jp

教育改革の推進

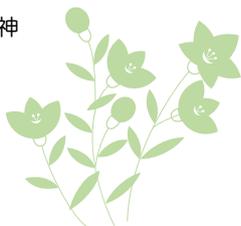


酪農学園理事長
平尾 和義

学園は昨年70周年というひとつの節目の年を迎えることができましたが、学園と皆さんが学んだ大学もいろいろな点で大きく変わりました。古い卒業生には淋しいことと思いますが、大学草創期以来の教職員はひとりもいなくなり、校舎、施設、設備も一変し、時代とともに大きく拡充されて、今や昔の姿をしのぶすべもありません。

またご承知のように、今教育を取り巻くいろいろな問題が論議されています。特に私学が直面する状況はますます厳しくなり、「競争」と「評価」の時代に入りました。私学には確固たる経営基盤が求められる一方で、次の世代の人間形成に大きな役割を果たすことが求められ、本学も例外ではなく大きな改革が迫られています。最も重要なことは本学が創立者の建学の精神に基づき、特色ある高等教育研究機関として時代と社会の厳しい評価に耐え、その期待とニーズに充分応えられる教育研究の内容、質を維持できるかどうかということです。このような中で学園は、大学を取り巻く経営環境の厳しさ、時代や社会の変化に伴う本学に寄せる期待への高まりを深く認識し、現在教育財務中期計画を進め、大学全体の組織再編や制度改革に取り組み、一層教育の質向上に鋭意努力しています。その第一段階として'05年4月に向けて、環境システム学部自然科学領域の「生命環境学科」を設置し、本学の特色をさらに発揮し教育理念をいかに現代に生かすかを考えつつ、新たな専門教育を推進しようとしています。

悲しいことですが、去る7月9日遊佐孝五先生が神のもとに召されました。今は先生の人格に接することはできませんが、先生は最後まで学園を思い、同窓生一人ひとりの幸福を願い続けておられました。先生の尽きない愛に心から感謝しあげ、その霊が神のもとで安らかならんことを祈り、先生のご遺志を継ぐべく役員一丸となって努力することを改めて決意しています。



シリーズ酪農学園の精神



同窓会校友会会長
石田 貞夫

2004年は、大雪、猛暑、台風、大雨、地震と多くの天災に見舞われ、家屋、田畑の崩壊、家畜、収穫直前の農産物等、経営の根幹を揺るがす被害を受けられ、さらに長期の避難生活と筆舌に尽せないこの災害に個々のOBの皆様がもてる力を発揮し、希望と目標を見いだし努力している思いにお見舞いを申し上げますと共に、一日も早い復興と平安を心から祈り致しております。

常日頃多くの同窓生から酪農学園が大きくなれば建学の理念、精神が薄らいで行く思いがするとの意見があり、ホームカミングデー開学記念シンポジウム、全国各地での研修会親睦会、支部の皆様の活力を受け大学の近況報告をさせていただいて来ました。今年は工藤英一事務局長の発案で4月にシリーズ酪農学園の精神(1)を創刊し、今回は松井幸夫先生執筆による「酪農学園設立の理念とその現状」を発刊致しました。シリーズとして始めた目的は酪農学園の歴史を証言する先生方が次々と他界されること、そのことが酪農学園の精神が失われていくことに直結していくのではとの危機感から、現在に結びついて脈々と生きている歴史的証言とご意見をいただしておくこと、さらに継続したいので同窓生にも熱い思いを後輩に語っていただきたい。松井先生は酪農学園での50余年の実践から素直に学園の過去と現在を比較し、貴重な提言をされ、外からの十分な応援と叱咤激励・建学の精神の本領を発揮し充実した学園になるよう力をお貸し下さいと結んでおります。

これを読まれた遊佐孝五先生(2004.7.9神のみもとに召されました)は「すばらしい企画です。是非1年に1冊と言わず続けて下さい」と1998.6.27ホームカミングデー記念礼拝の小冊子「酪農学園創立理念の継承」をわざわざ私に手渡してくださいました(2004.5.24)。先生は温和な笑顔で講義され卒業後も常に声をかけていただき卒業生を案じ思い育ててくださいました。書物を手渡されてから47日後に天に召され、思えば同窓生の協力を得て着実な継承と発展を願っていたと思います。

2010年大学開学50周年に向け本大学の特色である志の高い創立理念を艱難、忍耐、練達、希望の聖句を思い学園のさらなる実学教育、人間教育の向上に協力をお願い申し上げます。

(酪農学科1期 1963年度卒業)

新生・環境システム学部のスタート

～「建学の使命」を継承して～



環境システム学部長
加藤 勲

酪農学園大学で共に学んだ皆さんには、それぞれの立場でご活躍のことと存じます。本学は、皆さんのご支援をいただき、苦難を乗り越えて発展の途を辿ってきました。感謝に耐えません。さて本学は、学園創設以来、「自然—生命環境を守る」との視点を軸に、酪農が生命産業の基本であるとの認識から、これまで社会に貢献し得る人材の育成を使命としてきました。

そのような認識に立って、1998年度に2学科体制の環境システム学部をスタートさせました。しかしながら昨今、本学の教育理念をより鮮明にするために自然科学系の教育内容を充実させるべきではないか、という要請が学内外から高まってきました。そこで2005年度から、「生命環境学科」「地域環境学科」「環境マネジメント学科」の3学科体制で学部を新生スタートさせることになりました。今日、地球規模で抱えている多面的な環境問題をワンパックで究明しようとする教育体制です。

新設の「生命環境学科」は、地球上の生命圏（循環の場）を取り巻く諸現象を、物理・化学的な知見から究明するものです。カリキュラムには、理論にとどまらず「環境調査法演習」「知床釧路湿原実習」など実学的教育手法が導入されています。新編成の「地域環境学科」は、環境と調和・共生し得る持続可能な地域社会の創造を目指し、それを人文・社会学の立場からアプローチするものです。カリキュラムは、「地域環境」「環境政策」「共生・創造」の3系列で構成され、環境保全型社会の創造を究明します。新設の「環境マネジメント学科」（経営環境学科の改変）は、環境と調和し得ない産業活動は持続性を失うという基本認識の下に、環境を強く意識した産業社会の構築を目指し、それを経営学的な手法から究明するものです。新教育体制には、注目すべき試みとして、「地球環境科学概論」「地球生物多様性概論」など学部横断的な共通科目も設定しており、成果を期待しています。

同窓の皆さんには、本学の新たな飛躍のために、一層のご理解とご支援をお願いいたします。

就職の状況について



就職部就職課長
近 雅宜

酪農学園大学同窓会校友会の皆様には、日頃から本学学生の就職活動へのご支援を頂きありがとうございます。

本学の2003年度の進路状況ですが、就職希望者に対する内定率は92.0%でした。また、卒業者の進路の内訳は、就職者56.5%、大学院進学者4.2%、自営者6.3%、実習2.5%でこの合計は69.5%、また一時的仕事の者11.4%、その他の者（専門学校・研究生等）12.0%、未内定者4.9%、未定・不明者2.2%という結果です。

企業側の採用活動は、より質の高い人材を確保するため、従来の選考方法に加えエントリーシートやグループディスカッションによる選考もおこなわれ、近年では一部企業においてweb上で適性検査を選考に用いるなど大きく変化しています。

しかしながら、採用担当者に何うと、就職することへの意欲や熱意の低下とともに、活動の際の会社への電話連絡や挨拶、提出書類の内容、或いは面接時の服装や態度など就職活動のマナーを通じての“質の低下”が大きな話題になっています。

本学学生についても、この基本的な就職活動への取り組みやマナーが欠けているためなかなか内定を得ることが出来ず、実力を発揮しないまま最初の段階で就職活動からリタイヤする場合があることは非常に残念に感じます。

このような中で、社会で活躍されている同窓会校友会の皆様からの、就職環境や個別の採用情報、或いは本学学生の就職活動に関する率直なご意見やご助言は、なにより学内教職員・在学学生にとって非常に貴重なものです。

時代の変化はあるものの、就職についてはご縁の積み重ねから繋がることも多いので、これからも本学と社会の接続点として、多方面からの本学学生への就職支援を重ねてお願いいたします。



大学院生活を経て得たこと



家畜改良センター 技術部
成田 真知

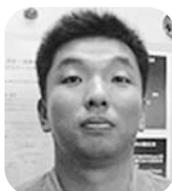
私は、家畜や飼料の改良、増殖を目的とした行政機関である家畜改良センターで、牛の受精卵移植技術の開発や、その実用化のための調査試験を担当しています。日本では、ほとんどの牛が人工授精で子どもを産みます。実は大学に入るまで、人工授精の「じ」も知りませんでした。人工授精では牛は1年に1頭しか子どもを生むことが出来ませんが、受精卵移植は、たくさんの受精卵を優秀な牛から採取して、他の牛に移植することで、短い期間に優秀な子をたくさん生産することが出来る技術です。大学と大学院で牛の体外受精や、凍結についての勉強をしていたので、私にとって今の職場は、大学で学んだ知識や経験を活かせるところです。

大学院生はゼミの最高学年となるので、リーダー的な立場となります。私が所属していた研究室は酪農学科の中でも学生数が多いゼミだったので、まとめるのも一苦労でした。教えたことを何でもすぐ器用にこなせる後輩、いつも一所懸命、でもちょっと間抜けな後輩、いくら言っても同じことで叱られる後輩……。色々な個性の集まりでした。しかしその分、物事の考え方、人との接し方、実験を後輩に教える楽しさ、難しさなど様々なことを学ぶことが出来ました。このような体験は、受精卵移植についての知識を得たことと同じくらい貴重であったと思います。家畜改良センターには、国内外から研修生が多数来所されます。私も技術指導させて頂くことがあります。大学院での経験が活かされていれば、と思います。

今、日本だけでなく世界的にみても、受胎率の低下など牛の繁殖に関する問題は山積みです。全国の酪農家や肉牛農家の方々に、少しでも喜んでもらえるように努力していきたいと考えています。

(酪農学研究科酪農学専攻修士課程 2002年度卒)

「現場」と「実験室」



宮城県仙台家畜保健衛生所
山田 治

同窓生の皆様には、様々な分野でのご活躍とますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

私は、平成3年に獣医学科を卒業後、同年大学院獣医学研究科に入学し、大学院を修了後、巡りめぐって、現在は宮城県仙台家畜保健衛生所に所属しています。大学院在籍中は、先生方をはじめ、先輩、同級生、後輩に助けて頂き、大変楽しい時間を過ごすことができたと感じております。

大学院入学時は、新制の大学院博士課程に移行して2年目で、院生の人数は、私を含めて6人(2年生2名、1年生4名)でありました。当時、私が所属していた獣医解剖学教室は、教職員4名、留学生2名、院生3名、加えて6年目、5年目の学生二十数名であり、大変活気のある大学院生活であったと思います。

平成7年に大学院修了後、私は、畜産の生産現場へ就職しました。というのは、多種多様な畜産関係の研究が畜産現場でどの様に活用されているかを実験したいが為です。畜産現場では、いろいろな地域で(転々と)、多種多様な仕事に従事(いわゆる広く浅く)することができました。その後、現場を踏まえて、自分自身が最も興味が湧いた家畜繁殖の向上にかかわる研究をする機会を得て、一研究員として従事することもできました。そして、現在は、家畜防疫を中心とした業務を行っています。

振り返ってみますと、「現場」と「実験室」を振り子のように行ったり来たりしているようで落ち着きがないと思われませんが、私にとって、両方とも大変貴重な経験でありました。そして、最も強く感じたことは、「現場」と「実験室」をうまく結びつけるのは、非常に難しく大変なことだと。

現場も多種多様です。研究も多種多様です。これから、自分自身に何ができるかわかりませんが、「現場」と「実験室」の両方を考えながら仕事を進め、「何かの役に、誰かの役に立てば・・・」という気持ちで歩いていきたいと思っています。最後に、落ち着きのない私を支えてくれている家族に感謝します。

(獣医学研究科獣医学専攻博士課程 1994年度卒)

「研究の道を歩んで」



大高酵素株式会社 研究部
山森 昭

私の苦手とするものは勉強でした。そんな私が、酪農学園大学・食品科学科を卒業後、同大学大学院にて博士号を修得、現在、企業の研究人として研究の道を歩んでいます。勉強が苦手な私がなぜ?と思う方もいらっしゃると思いますが、今まで自分は勉強が苦手と思い、「学ぶ」という事に正面から立ち向かわなかったのが、あるきっかけで、なんで?どうして?もっと知りたい、と興味を抱くようになりました。そのきっかけになったのが、学部時に履修した卒業論文でした。食品栄養化学研究室に所属し、正直、当初は全くと言っていいほど研究に興味がなく、ただ単位欲しさに履修していた卒業論文でしたが、次第に研究の面白さに気づくと同時に、学ぶ事の楽しさ、重要性を知りました。あの時、卒業論文を履修してい

なかったら、大学院に進学し博士号を修得することもなく研究の道も歩んでいなかったと思います。

来年度で入社2年目を迎えます。大学から離れ、社会に出て毎日真新しい事ばかりであり、「学ぶ」という事には変わらない充実した日々を送っています。研究職ということもあり、在学中に取り組んでいた研究の延長のようにも思うのですが、企業は学校と違い組織で成り立っているため、自分の発言がどんなに些細な事でも、時には会社全体を動かす大きな発言になってしまう。また、大学院生の頃のように研究だけやれば許される世界でなく、一人一人が個人の責任をもって発言し、行動しなくてはならない緊張感のある世界だと感じました。だからこそ「やりがい」があるのかもしれない。

ここに書いた事は、私自身が社会に出て感じた事なので、誰もが必ずしもそう感じているかは分かりません。しかし、「成功しても、失敗してもそこで得るものがあり、得たものは必ず今後の活力になる」という事は、皆さんも感じているのではないのでしょうか。

今後も、学ぶ事の楽しさを忘れず、前向きにがんばっていきたく思います。

(酪農学研究科食品栄養科学専攻博士課程 2001年度卒)

第13回 ホームカミングデー開催

2004年6月26日（土）大学白樺祭で賑わう中、第13回ホームカミングデーが黒澤記念講堂に於いて開催されました。当日は快晴で6月の風が爽やかに吹き足どりも軽く懐かしい人々の再会となりました。

高橋一宗教主任の礼拝・奨励に続き、当大学名誉教授原田勇氏による「学園にアルファルファが育って・・・今」と題する記念講演が行われました。その後ミニパーティーを行い楽しい歓談のひとつときを過ごしました。校友会ホームページに写真が掲載されていますのでご覧ください。

（HPアドレス：<http://dousoukaikouyukai.web.infoseek.co.jp>）

ホームカミングデーの小冊子を発行いたしました。若干残部がございますのでご希望の方は校友会事務局までお問い合わせ下さい。



記念礼拝で講演される原田勇名誉教授

同窓会校友会事務局より

校友会事務局長 工藤 英一

2004年も終わり新しい年が始まりましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。昨年は北海道でも暑い日が続き、12月には東京でも25度を記録するなどまさに異常気候の年でありました。また台風による被害、たくさんの人命が奪われた新潟中越地震、釧路沖地震と、立て続けに起きる地球の鼓動を私たちはどのように認識し、かつ対策を立てることができるのでしょうか。昨年ある自然保護団体の会合で学生達が「地球が危ない」と言っていました。まさにそのような状況に私たちはおかれているのでしょうか。

私たち人類の異常繁殖、その結果としての自然破壊が、地球全体のバランスを壊し続けた結果、このような異常気象となっているのであれば、私たちはもっとも困難な袋小路に入り込んでいるかもしれません。酪農学園大学だからこそできる知恵を今こそ提供すべきでしょう。

ところで、昨年台風によって酪農学園でも倒木120本という被害を出しました。この倒木は一体どこに行ったのでしょうか。ほかの機関ではそれを使ってイスを作ったり、市民の方に差し上げたり、場合によっては倒木の復活をかけた研究プロジェクトを立ち上げたりと、それぞれ英知を絞った活動をしています。こういうところに対しても工夫のできるきめ細かい対策を取ってもらいたいものです。

さて、私たちは食糧問題に対しては第1人者たる自負をもっているはずですが、外に対しては食糧の自給率向上を訴えています。身の回りでの自給率向上を実践しているのでしょうか。例えば酪農学園大学における自給率対策は？地震など自然災害が発生したときに学生に対する食糧支援対策は？暖房（例えば薪）などの対策は？市民のための支援対策は？疑問はふくらむばかりです。私はこのような対策に対しては卒業生の方を含めた支援システムが最も重要だと考えています。困難な問題が山積みですが、一つ一つ解決していくしかありません。卒業生の皆様のご協力をお願いいたします。



2004年度酪農学園同窓会校友会理事・代議員会報告

5月22日（土）2004年度同窓会校友会理事・代議員会が新札幌アークシティホテルにて開催された。（出席者23名、委任状30名）野村副会長を議長に第1号議案：2003年度事業報告、収支決算、第2号議案：2004年度事業計画、収支予算、第3号議案：会則改正について、その他を慎重に審議し承認されました。

会計報告 2003年度決算および2004年度予算について下記の通り承認された。

一般会計報告（単位：円）

収入

項目	2003年度決算	2004年度予算	
前年度繰越金	9,236,973	9,735,452	
分担金	2,811,000	2,850,000	950名×3000円
利息	1,472	2,000	
助成金	10,000	10,000	理事・代議員会への助成金
ホームカミングデー助成金	0	100,000	
雑収入	18,000	0	理事・代議員会懇親会費
合計	12,077,445	12,697,452	

支出

項目	2003年度決算	2004年度予算	
会議費	61,144	100,000	理事・代議員会他
連合同窓会	640,200	640,200	負担金
在学生関係	100,000	150,000	白樺祭支援他
会報関係	215,370	250,000	印刷代、執筆者へのお礼
ホームカミングデー費	0	150,000	
シリーズ小冊子	0	200,000	
コンピューター費	44,570	100,000	プリンター修理、HP開設費用他
人件費	1,071,996	1,200,000	事務局長手当て含
通信費	38,174	50,000	電話代、郵送料
旅費交通費	40,660	50,000	理事・代議員会交通費
慶弔費	20,580	50,000	弔電、香典料
事務用品費		70,000	
消耗品費	109,299	20,000	
雑費		30,000	
合計	2,341,993	3,060,200	
収支差額	9,735,452	9,637,252	

事務局だより

夏すずしく、冬底冷えのするこの同窓生会館に異変が!!
2004年夏は暑い！暑い！の言葉が出たのです。

さすがに地球規模の異常気象はこの会館にいても感じられる程でした。この環境変化の中、新生環境システム学部が地球の未来に貢献する人材を育成することに期待します。

とりあえず、ここで涼しく過ごせる夏が戻ってくるなら冬の寒さを我慢しましょうか…それが正常な気候なんですから！（S・K）